

2021年 「コロナ」・「オリンピック」・「東日本大震災 3.11 から 10年」 — 学生が語り継ぐもの —

鈴木 裕美子^a

^a 湘北短期大学リベラルアーツ・「メディア論 A」担当 非常勤講師

【抄録】

2021年。コロナ禍2年目。メディア論の受講生2年生は高校の卒業式も短大の入学式も、短大1年生の楽しいはずの短大生活もなかった。しかし、彼らは、コロナ禍で悩んだこと、オリンピックを経験したこと、東日本大震災を大人の目で学びなおしたことを、「自分たちよりも若い世代に語り継ぎたい」と考えるようになった。本稿では、2021年のメディアトピックを通して学生の成長を記録する。

【キーワード】

コロナ、オリンピック、311 東日本大震災、ワクチン、デマ、SNS

(I) 2021年度授業スタート

「特別な2年生」

「近くのクラスにいたんですけど、先生が『密になるから、他の教室に行きなさい』って。この授業、受けてよいですか」と元気いっぱいの3人の女子学生が入ってきました。コロナ下の最初の授業らしい飛び入り参加です。視聴覚教室で行われている『メディア論A』。通常は144人定員の部屋に76人が受講することになりました。視聴覚教室は、東南角地日当たり良好、眺望よし。北側に二つの入り口、さらに東と南が全面窓で、空気は入れ替え放題。

昨年までは受講者は20数人程度でしたので、今年はなぜこんなに多いのか…。学生の落ち着きのないうるさきに戸惑いを覚えながら、授業の最後に「リアクションペーパーにコロナ禍での生活について

書いてみましょう」と促しました。

そこにあったのは「失われた短大生活」を取り戻そうと「体験的」な授業を求める学生の姿でした。本講座はグループワークなどを盛り込んでいるので「体験授業ができる」と受講者が増えたようです。

『メディア論』の受講対象は2年生。今年の2年生は、学校閉鎖・緊急事態宣言のあおりが直撃しています。¹2020年3月の突然の全国一斉の学校閉鎖で、高校最後の授業も行われず卒業式もなくなりました。試験に合格して入学した短大で入学式もなく、緊急事態宣言下のため対面授業もなく、授業はオンラインが中心で、学園祭もなく、学校生活に期待したものがすべてない状態で1年次を過ごした学生です。はじめてのオンライン授業に戸惑い、誰に相談したら良いかわからず、ついていけなかった学生も多くいたようです。何のため

に短大に入ったのかわからない、特に、本学は学生生活が充実していると評判で期待して入学したのに、コロナのせいで全て無くなってしまったと、嘆く声が多くありました。(勿論、大学は最大限のフォローの手を差し伸べています。)

昨年の2年生は辛うじて1年間普通の学生生活を送ることができました。オンライン授業に戸惑っても、相談できる学内の仲間を作る時間がありました。

ところが、2021年度の2年生は全く違います。友人もできないまま2年生になり、新しい生活への不安、目の前に迫る就職試験への緊張、失われた学校生活を取り戻したいという焦り。彼らの文章からは「学生生活はあと1年しかない」という切実さが伝わってきました。

緊急事態宣言が解け一時的にコロナが下火になっていた新学期。ソーシャルディスタンスを取りやすく、換気がしやすい環境に恵まれた教室で行える私の授業は、彼らの希望通り、状況が許す限り対面で行こうと決意しました。

…しかし、感染予防のため、資料は授業開始時に学生に配布する形式ではなく、事前に私が各自の机に置いておくなど、準備には相当の時間を要しました。この時期は「人が触った紙には触らない」という位、緊張した状況でした。

…また、例年、前期は就職試験のための欠席が多いのに加え、コロナ禍ではちょっとした体調不良でも感染防止のため休むよう指導されており、授業は70人から40人の出席で行われました。皆勤の学生には申し訳ないことながら、必ず前回前々回の復習的な導入から当日のテーマに入ることになりました。

(Ⅱ) 2021年のメディア論 「コロナ」・「オリンピック」・ 「東日本大震災3.11から10年」。

2021年のメディア的トピックは「コロナ」・「オリンピック」・「東日本大震災3.11から10年」です。授業では「メディアとは何か」「情報を媒介するもの(メディア)としての新聞・ラジオ・テレビ・インターネットなどの各メディアの成り立ちや特性と役割」を解説します。2021年は上記3つのトピックにからめて展開することにしました。

私たちは大人も学生も、コロナ渦の中、どんな情報を取捨選択するのか、日々試されているようなものでした。…私の本務は『朝まで生テレビ!』ⁱⁱ(テレビ朝日 毎月月末金曜深夜放送)のプロデューサーですが、コロナ下で目まぐるしく変わっていく感染状況、それに対応する社会状況の変化についていっただけでも必死でした。前代未聞の状況が次つぎと繰り返され、しかも健康と命に直結する事案です。毎月の放送も真剣勝負でした。

特に学生は、学期の半ばごろから始まった若者向けのワクチン接種に関する情報で大混乱に陥りました。私は彼らがデマに翻弄される姿を目の当たりにすることになります。凶らずも、学生は「デマ」とは何か、身をもって学ぶことになりました。

そして、2021年は、2020東京オリンピック・パラリンピックが1年順延された年です。本当に開催されるのか、開催するとすればどういう方式なのか、多くの国民にとっては、開催による感染拡大が怖いという気持ちが強かったのです。「アスリートの活躍は見たい、だが、感染は怖い」に付きましました。日本中が熱狂した1964年とは全く比較できない2021年でした。

また、2021年は、2011年3月11日の東日本大震災から10年目の節目の年でした。さらに、2001年9月11日のアメリカの同時多発テロから20年目であり、ⁱⁱⁱ雲仙普賢岳の火砕流が多くの人命を奪った1991年から30年目の年です。この年はソ連邦が崩壊した年でもあります。遡れば1941年、真珠湾攻撃、太平洋戦争開始から80年という節目でもあります。

メディアの役割の中には歴史を伝えるということがあります。この節目の年に上記したすべてを伝えられるわけではないけれど、彼らが体験したことを通じて学んでもらいたいと考えました。

2年生は、小学3年生前後で東日本大震災に遭遇しています。いわば、歴史の生き証人です。彼らの体験を、あらためてこの節目の年にメディア論を通して学んでもらいたい、あの東日本大震災が人々に何をもたらしたのか、その時にメディアがどんな役割を果たしたのか、学んでほしい、と考えました。

(Ⅱ) — (1) 「コロナ」

～ 学生が求めた情報 ～

最初の授業のリアクションペーパーに、学生の多くは「コロナ禍で外出できなかったから、ネットで動画を見て楽しんだ。友達とSNSでつながっておしゃべりした」と記述しました。「寂しさを埋めるため」「友達と会えないから」「娯楽が必要だから」…が主な理由でした。もちろん、「ニュースを見て感染状況を知った」「自分の地域にどんな病院があるかチェックした」などもありました。

2回目の授業では彼らの声を一部紹介しながら「情報の取捨選択」について、私から補足しました。「皆さんは『友達とつながった』『動画の世界を楽しんだ』と書いて、楽しみのためにメディアを利

用した、と書いた人が多かったのですが、『今日の感染状況はどうか、出かける予定はあるけど、感染が広がっているから外出はやめよう』という自分の行動の判断材料にする人もいました。皆さんは意識するとしないとにかかわらず『生きるための情報』をメディアから取捨選択していたのです。こう説明すると「そんな大げさな事かなあ～」と怪訝な顔をする学生もいました。

昨年の2年生の中には「正しい情報を得ようと（テレビ局は信頼できると思ったので）テレビ局が発信するネットニュースをチェックした」「ニュースで学生向けの給付金があることを知ったので、調べて給付金をもらった」という学生がいて、情報に真剣に向かい合っていた姿がありました。

しかし、今年の学生の中には、自覚的に「情報を取りに行く」という気持ちは薄いようでした。1年以上コロナの情報が流れていて、最初のショックの時期は過ぎ、情報過多、飽和状態だったのかもしれない。むしろ、耳も目もふさぎたい位だったのかもしれない。

しかし、自分が生きるための情報は大切です。どういう情報が必要なのか考えて、情報を取りにいかなくてはなりません。

やがて、学生はこの学期の半ばには、待ったなしにこれまでの「楽しみの為」ではなく、「生きる為」の情報選択を迫られることとなります。それはワクチン接種の問題です。

日本では日本国内での治験を経たこともあり、欧米よりも遅れて、2年半ばから医療従事者、4月から高齢者へのワクチン接種が開始されました。その後、6月から職域接種が始まり勤労者の接種がスタートします。

そして、6月17日から18歳以上を対象に、8月12日からは12歳以上を対象に拡大されます。いよいよ、学生への接種が始まりました。

(Ⅱ) — (2) 「コロナ」

～「ワクチン接種」情報に翻弄される～

7月の半ばになると、ワクチン接種に関するデマが世界中で問題になっていました。『効果がない』『不妊になる』というデマが飛び交い、接種率が伸び悩んでいました。

インターネット関連会社もデマに対し、手をこまねいていたわけではありません。

^{iv}2021年7月6日の読売新聞では、各社の対策について以下の様に報じています。

「フェイスブックは、保健当局や専門家が否定した情報に関する投稿は削除。Twitter は誤解を招く投稿やリツイート（転載）や『いいね』の返答を不可に。Yahooは、デマを打ち消す記事を積極的に配信、専門家と共同で正確な記事の作成も。LINEは中央官庁や自治体が公式HPで情報発信する、など」。

ワクチン接種を開始するにあたり、専門家は「“有効性とリスク”を理解した上で」という言葉を強調しました。「個人個人、体質も体調も家族環境も違うので、強制ではなく、自分の意志で接種してください。打つ打たないで、差別されることがあってはいけません」などの文言も付け加えられました。

しかし、医学の専門家でない私たちは、いったい何をもって“有効性とリスク”を判断し、誰の言葉を信じたらよいのでしょうか。

学生は「ワクチンを接種すべきか否か」悩んでいました。まるで、ハムレットの究極の問い「生きるべきか死すべきか」に等しい程の煩悶でした。「ワクチン接種すると不妊になる」という情報が彼らを悩ませていたのです。

7月29日の授業では、出席者の3分の1が「『不妊になる』という情報を聞いて不安になった」と言いました。最初は挙手を求めたのですが、かなりの人数に驚き、手を挙げた人にそれぞれ聞くと、

おずおずとした感じの返答が続きました。

専門家は「不妊になるという科学的根拠はない」と繰り返していましたが、^v不妊を打ち消すような報道も度々なされていました。彼らもそういうニュースを目にはしていただいでしょう。でも、彼らの心には届いていなかったのです。

私には、学生が不安になる気持ちが理解できました。実際、ワクチン接種は世界的にも昨年始まったばかりです。ワクチンを打った人が、来年、再来年10年後、20年後、不妊にならないと、誰が保証してくれるのか。若い女性にとって人生の一大事なのです。流行りの言葉で言えば「長期的なエビデンスがない」のです。

「不妊」という言葉以外にも、副反応が怖いとした人はクラスの半数以上でした。

学生の声です。

「ワクチンを打つことで対策の一つになるなら早く打ちたいと思ってる。ただ、副作用にビビっている自分もいます」「不安がたくさんです。副作用をたくさん聞くので、どれが本当かわからなくなります」「政府のいう事も、SNSで書かれていることも、専門家のいう事もなにをしんじればいいのかわからない。自分の目でたしかめられるまでは打ちたくない」。

不安の坩堝の中にいる学生にとっては、「“有効性とリスク”を理解したうえでワクチンを受けるかどうか決めてください」と、判断を迫られても困るばかりなのでした。

状況が見えない中で、自分の健康をどう守るのか、まさに、自分自身で判断しなくてはいけない、その為には、情報をどう読むのか、問われていました。

そこで「メディアの責任」という角度から、情報について学生と考えることにしました。各メディアの特性など一通り解説していた時期だったので、『デマ』についても考えやすくなっている時期でした。

(II) — (2) 「コロナ」

～「ワクチンデマ」をもとに「デマについて」考える～

「デマについて」 (i) デマの心理・・・・・・・・。

社会動乱・自然災害などの際、人々は不安や恐怖を感じ、疑心暗鬼になります。人は、困った状況、不利益を受けたくないため、デマに影響されやすくなっています。

また、デマには恐怖心からくるデマ、間違いによるデマ、意図的なデマがあります。

1923年の関東大震災では、デマの為に朝鮮人虐殺事件が起きています。この時まだ日本ではラジオ放送が始まっていませんでした。口伝えに恐怖が拡散し、間違った情報の為に悲惨な事件が起きてしまいました。後に、ラジオ愛好家の間では、もしこの時にラジオがあれば、間違った情報はいち早く打ち消され、あのような事件は起きなかつただろうと語られた、というエピソードもあります。(日本ではラジオ放送開始は1925年。)

東日本大震災でも、人々は様々なデマに悩まされました。工場地帯での火災、品不足、ライフラインの問題等々。

また、^{vii}2016年4月に起きた熊本地震では、「動物園からライオンがはなれた」という文言に加え市街地を歩くライオンのフェイク映像が拡散されたことによって人々が不安になりました。犯人はこの後、逮捕され、後に不起訴処分となっています。

しかし、最近では、人が間違った情報を与えるのは、恐怖心、単なる間違い、意図的なフェイク、だけではない、という事もわかってきました。

昨年のコロナ禍では、トイレットペーパー品不足デマがありました。「品不足ではないので、安

心して」「品不足はデマだから、大丈夫」というSNS上での発信があり、瞬時に大量に拡散されたために、「逆に品不足ではないか」と人々を疑心暗鬼にさせてしまったというものです。

そして、疑心暗鬼になった人々がトイレットペーパーを買いに走るなどの混乱がおきました。「デマを信じて、他の人が買いだめしてしまって、品不足になるかもしれない」と思った人も多くいたようです。その結果、ニュースなどで、お店の中のトイレットペーパーの棚が空っぽになった映像が紹介されると「やっぱりないんだ」という不安が増大し、買い占め騒動となってしまいました。

これは「誰かを安心させよう」とした発信が、まったく逆の結果を招いた一例です。不安や恐怖で疑心暗鬼になった人々は更なる不利益をこうむるのを恐れるあまり、善意を率直に受け取れなくなってしまったのです。

詳しい分析は日経新聞2020年4月6日『善意の投稿 人類翻弄』^{viii}が行っています。

…なお、この混乱を受けて、テレビ局や新聞社はトイレットペーパー品不足デマのニュースを伝える際は、原稿では十分に在庫があることを伝えた上で、映像については、空の棚の映像を使用しないようになっていきました。

この間の各紙・各局のニュースを見比べていると、『品不足デマ騒動』を事実として正確に伝えながら、品不足の印象は与えない様に、人間心理を考えた報道の仕方を模索している様子がよくわかりました。報道機関は、限られた紙面、限られた放送時間の中で、読者視聴者にいかに的確に事実を伝えるのか、手腕が問われているのです。

「デマについて」(ii) ～メディアの特性～

デマの解説を一通りした後、学生に改めてこれまで3カ月ほど学んだメディアの特性を確認してもらいました。テレビ・ラジオ・新聞&ネット(SNS)は、不特定多数の人に対し情報を発します。

では、その情報の中に、事実誤認やデマがあった場合、受けとる側はどう向き合えばよいのでしょうか。

Q. あなたは、何を?誰を?信頼するのか

Q. 情報の発信者は誰か? 責任をもって発信しているのか?

Q. 何を目的として発信しているのか?(報道目的、広告、承認欲求、利潤、扇動、親切心…)

Q. その情報はチェックされたものか? ファクトチェック(事実確認)されているのか?

Q. 情報の発信者は誤情報を発信した場合、訂正をしているか? 「絶対に間違えない」事はない。大切なことは間違えないように努めること。ファクトチェックが重要。間違えたら、速やかに訂正することが必要。

Q. 発信された内容を、チェックする・しているのは誰か。

⇒誤報・デマのチェックは重要だが、誰が何をもち「誤報」や「デマ」と判断するのか。

⇒「表現の自由」との兼ね合いは? 「検閲」には当たらないのか?

Qを上から順に確認していきます。新聞社やテレビ局は自らを報道機関として、責任をもって報道しています。目的は報道であり、情報は、記者・デスク・編集長などがチェックしています。仮に間違えた場合は、訂正が行われます。人間のすることですから間違いは決してないとは言えません。しかし、間違いがわかった時にどうするのか、責任のある対応が求められます。また、状況が変

化すれば、当初正しかつたと思える事実が間違っていたと判明することもあります。報道機関は、継続的に事実をチェックし正しい報道を行おうと努めています。

一方、SNSでは、個人が発信し、誰かによってリツイートされます。組織的にファクトチェックを行い、訂正するなどの体制を取っているものは少ないのではないのでしょうか。SNSの情報は、誰が、どのような目的で発信し、誰がどのような目的でリツイートしているのか、見極める必要があります。

では、以上のようなことを踏まえ、ワクチン接種について考えてみましょう、と促しました。

「デマについて」(iii)

～ワクチン接種にあてはめてみる～

「接種すると不妊になる」と言ったのは誰か。その根拠は何か。伝聞なのか、事実なのなのか。

「なりそうだから、怖い」という感想、反応なのか。「そういう事実がありそうだから」という仮定をもとにした「ワクチンは打たない」という意思決定なのか。あなたが接した情報は何かですか。

重ねて、私は問いました。

「もしかしたら、あなたのご家族が心配して、ネット上の『不妊になるかもしれない』などの記事あるいは憶測を転送し、『怖いね』、『状況が見えるまでは、接種をやめておけば』というアドバイスを送っただけかもしれません。…。どうでしょうか。この例では、あなたを心配しただけで、何故不妊になるのか、などの『不妊になる』という情報の根拠はないようですね。」

教室がざわざわするのがわかりました。私は、授業の中では、ワクチンそのものについては一言も触れていません。たんに、あなたが囲まれている情報はどのような情報なのか?と、学生に尋ねただけなのです。

「不妊」という言葉に凍り付いて氷の様だった学生。漠然と怖がってばかりいないで、情報を一つ一つ確認することで、自分がどのような情報に囲まれていたのか、検討する心の余裕が生まれたようでした。

次は、学生が、自分の頭で考える番です。

「就職試験を受けるためには、ワクチン接種を済ませないといけない」「だけど、受けたくない」と悩んでいた学生も数名おりましたが、少し冷静になったようです。

この日の出席者は61人、授業後、リアクションペーパーを提出してもらったところ、6人が「ワクチン接種による不妊への不安」をあらためて訴えていました。

私はこの6人は自覚的に「不安」を言語化できたことで、一歩前進したと考えます。しかし、出席者の1割が不安について記述しているということは、まだ半数以上が、言葉にはしないものの不安の中にいるのだろうか、と推測しました。

授業後のリアクションペーパーの抜粋です。

1番目の学生は、「ただの怖い」状況から、自分がSNSに翻弄されていることを自覚するようになりました。

「私はワクチンを打ちません。もともと注射が嫌いだからという事も理由の一つになってしまっていますが、たくさんの方々の情報が流れていたからです。もちろん、全てが正しい意見だとは最初から思っていません。ですが、その情報が必ずしも“嘘”とも信じきれないからです。デマだったとしても、誰かが『不妊になるかもしれない』という不安があり、その言葉がSNS上でまわりにまわってきて『不妊になる』に変化したかもしれないと考えました。自分の家族が自分のせいでコロナになってしまい苦しんでほしくないため、ワクチン

を打った方がいいことは分かっているのですが。デマが不安にさせてくるのでやめてほしいと心から思いました。SNSは恐ろしいと思いました」

自分が何を恐れているのか自覚できたことは一歩前進です。次に紹介する2番目の学生は世に言う「同調圧力」にも苦しんでいます。

「私はワクチンの接種は任意だから打ちたくないと思っています。例えば、『効果がない』という情報に関しては、インフルエンザのワクチンを打ってもかかることはあるし、とも思います。

一方で『不妊になる』という情報は、人間として、本当だったら怖いと感じます。不妊になった例は今の所聞いていないけれど、その逆の確信も聞いていません。任意の接種ならば自分の中で納得できるまで打ちたくないです。けれど、来年から会社で働き始めたりする中で『半強制的』に打たなくてはならないことがあると思うし、今もニュース番組の画面に「コロナワクチン接種人数」がずっとうつされています。それは“任意と言えるのかな”と思ってしまいます。」

1番目の学生と2番目の学生は、ともに「不妊症には絶対ならない」という保証を求めていることは共通しています。いくら、厚生労働省が『不妊にならない』とHP上に載せていても、国が将来の自分を守ってくれるわけではない、信じきれない、というのが、彼らの不安なのです。若い女性ならではの悩みに、私も共感します。

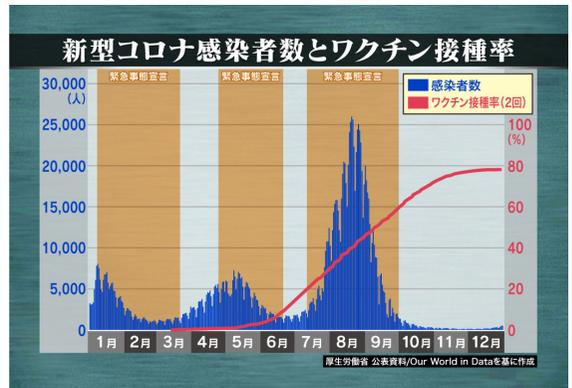
3番目の学生は、不安を解消するのは自分自身しかいない、と覚悟を決めたようです。「ワクチン接種をするかしないか」以前に、まずは、情報を見極めよう、としています。

「大学でもコロナワクチンの接種があり、友達に受けるか聞くことがあったのですが『○○らしいよ』『○○だから怖い』と帰ってくるのがほとんどでした。日々そういったやりとりをしていると私もワクチン=不安・怖いという気持ちになってきて、接種をやめようか正直今も悩んでいます。しかし、今日の授業でデマの心理を学び、皆、不安なのは同じだからこそ、根拠のない情報を信じてしまうのだと分かりました。大事なのは『○○らしい』ではなく、どこの組織がどのように発信しているのか、責任を持った言葉なのかをチェックすることだと気づかされました。そういった確認は手間や労力がかかるものですが、不安だからこそ、時間をかけて正確な情報を調べなければ、状況は変わらず、いつまでも周りに流されているままだと思います。面倒だと思わず、自分の命は自分で守れるよう行動していきたいです。」

さて、その後です。日本は国民皆保険で、国民は大きな負担なく、病気になれば、すぐ医療を受けることができます。それは長い間の国民の努力の賜物で、社会の常識でした。しかし、それが一気に崩れ落ちたのが、コロナの第5波でした。8月感染者数は日々更新し8月20日一日の新規感染者数は2万5990人と最悪の状況になっていきます。若い人でも病状が急変し、自宅で亡くなるケースも報じられるようになりました。病床数世界一を誇るわが国で、中等症でも病院に入れず、必要な医療を受けることもできず、緊急搬送困難事案も多く、亡くなるコロナ患者が相次ぎ、社会は半ばパニック状態になりました。

皮肉なことに、ワクチン接種をためらっていた若者も、この事態に一気に接種へと舵を切ることになりました。おそらく、私の学生も例外ではなかった事でしょう。

大人も学生も、生きていくための情報と向かい合った夏でした。



新規感染者数とワクチン接種率

「デマについて」(iv)

～「総務省の調査」と「検証番組」～

viii 総務省の2020年5月13日から5月14日に行われたウェブアンケート「新型コロナウイルス感染症に関する情報量調査報告書」(2020年6月9日発表)を紹介します。

概要：近時、新型コロナウイルス感染症に関連して間違った情報や誤解を招く情報が発生・拡散しており、今後の被害拡大が懸念されます。総務省では、これらの情報を踏まえ、新型コロナウイルス感染症に関する情報流通の実態把握をするため調査を行いました。

<調査結果> (抜粋)

- ・およそ4人中3人が新型コロナウイルス感染症に関する間違った情報や誤解を招く情報に触れていた

- ・比較的多くの人が新型コロナウイルス感染症に関する情報の真偽を判断できなかったという傾向が見られた。

- ・新型コロナウイルス感染症に関する間違った情報や誤解を招く情報を見聞きした人のうち「正しい情報である」などと信じて共有・拡散したことがあると答えた人の割合は35・5%。

そして、報告書は続けて、こんな指摘もしています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「若い年代ほど間違った情報や誤解を招く情報を信じてしまった割合や拡散してしまっただけの割合が高くなる傾向が見られたことから、特に若い年代に対してリテラシー向上の取組を充実させていくことが必要である。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

さて、上記したように、この調査は学生がワクチンデマに翻弄される1年以上前に行われたものです。したがって総務省の問いはワクチンについて尋ねているものではありません。

しかし、1年前にはすでにコロナ下に入り情報に翻弄される日本社会の姿・若い人の姿が浮かび上がっていました。誰かがどんなに警告をしようと、不安の中において疑心暗鬼になった人たちには届かなかったこともわかります。では、どうすれば、よいのでしょうか。

一つの答えとして、デマに対する「検証」があります。

前期の授業も試験も終わった9月6日。¹⁸ NHKの「おはよう日本」朝7時台のニュースの中で、不妊デマを検証する特集コーナーが放送されました。

サブタイトルは「注意：ワクチン誤情報 増える巧妙な発信」。

「『無期限の不妊症』を引き起こす懸念がある」「男女ともに不妊になる可能性もあります」という二つの誤情報を取り上げて、その出元など検証しています。医療品医療機器総合機構のワクチン等審査部の荒木康弘部長はインタビューに答えて「新型コロナウイルスワクチンの承認申請をした際に、情報公開用に提出した資料を悪用したものと指摘しています。根拠あるように見える情報に

多くの人が振り回されている実態が見えてきました。また、良かれ、と思って、誤情報と知らずにリツイートした人の声も紹介されていました。

この頃、他局でもおなじような検証報道がいくつか見られるようになりましたが、このような検証報道があることで、多くの人の不安が払しょくされることを改めて感じました。

コロナ下にあって、テレビのニュースは日々の感染情報や病床逼迫の状態、患者の症状など、伝えなくてはならない最新の情報があまりに多く、一方、ニュースの放送時間枠は限られているため、なかなか、調査報道、検証報道に時間がさけない状況が続いていましたが、やはり社会が混乱するときこそ、このような調査報道・検証報道の重要性を改めて感じざるを得ませんでした。

一方、SNS上には情報が溢れすぎ、何を選択すればよいのか、若い人でなくとも迷うところです。

(ワクチン余談)

¹⁹9月3日、菅義偉総理が事実上の退陣表明。安倍政権を引き継いで1年。菅内閣ではワクチン接種を一日の接種目標を100万回に掲げるなど積極的に進めました。しかし、国民の不安を押し切るようにオリンピックを開催しました。コロナ禍で国民が反対する中、何故、オリンピックを行うのか、政府の説明も十分とはいえないものでした。感染者数も更新し続け、支持率が低下。コロナ対策に専念するためとして、次の自民党の総裁選への立候補を断念すること表明し、事実上の退陣となりました。この夏、国民生活はコロナ一色となっていました。

…私は「職域接種」という言葉を初めて聞いた時に、おや、耳慣れないが、どこかで聞いたことがあると思いました。それは²⁰玉音放送の中で知っ

た言葉でした。もしかしたら、「職域」という言葉は行政用語としてはごく当たり前に使われている言葉かもしれませんが、これまであまり聞かれなかった言葉です。

国を挙げて行動するときに使われた「職域」という言葉。仕事の持ち場、という意味だけではなく、広義には「それぞれの持ち場で」という意味もあります。挙国一致して、結果として敗北を喫した戦争。パンデミックはたしかに有事です。まさに安全保障が求められていますから、挙国一致でありたいと思うのは理解できなくもないのですが、このような感染症有事の場合に、戦争時代の言葉が蘇ることに違和感を覚えたのは私だけでしょうか。

今回のワクチン接種は、菅政権の掛け声のもと、医療現場、行政の力、各職域の力が最大限発揮されて9月には国民の7割弱が接種を終えています。混乱した部分もありましたが、全体としては初めての試みとしては順調に進んだと思えます。菅政権退陣後の9月末には、感染者数が激減しました。接種率をみれば感染予防の効果が大きかったことがわかります。皮肉なことに、感染者数が少なくなったこの時期には、退陣した菅政権も再評価されることになりました。

(II) — (2) 「オリンピック」

～見たいけど、怖い～

1964年の東京オリンピックは、初めて国際衛星中継（当時は「宇宙中継」と称されていた）されたオリンピックとして、メディア史に残るイベントでした。そもそもオリンピックは開催する国と参加する国が協力して放送する、メディアの祭典という性質もあります。

SNSの中にどっぷりはまっている学生。彼らはまさにインターネットはあって当たり前のZ世代ですが、オリンピックの宇宙中継とインターネットが歴史的にはつながっていることをこの授業を通して学ぶことになりました。

インターネットとは、複数のコンピュータを接続したネットワーク同士を接続した、TCS/IPという通信規約に基づいて全世界に張り巡らされたデジタル通信網をさします。冷戦時代、宇宙を制するものが地球を制するとばかりに、米ソは宇宙開発事業を行いました。この宇宙開発事業の中で通信衛星システムが作り上げられていきます。

日米間で通信衛星による初めてのの中継は、1963年11月23日。翌年開催のオリンピック中継の準備も兼ねられていました。予定ではアメリカのジョン・F・ケネディ大統領のお祝いのメッセージが流されるはずでしたが、この直前ケネディ大統領はダラスで凶弾に倒れ、放送では大統領の訃報が伝えられる事となりました。月へ人を送るアポロ計画を掲げ、その為に世界中に通信網を張り巡らそうとしたケネディ大統領の悲劇でした。

そして、その翌年1964年、東京オリンピックは世界に衛星中継された初めてのオリンピックとなりました。通信網の拡充という点で、オリンピックの歴史も今のSNSに通じているのです。

さて、世界中の放送局が協力しながら放送をするとは、具体的にはどういうことなのか、実際の放送と照らし合わせて、解説しました。英語の組織名ばかりで混乱する、と言いながらも、オリンピックの裏側を知れる、と、学生は興味津々でした。

◇組織・仕組み

国際オリンピック委員会 (IOC) の公式放送

機関は、オリンピック放送機構（OBS: Olympic Broadcasting Services）といい、世界中の150を超える放送局に競技映像・音声・データを提供しています。

オリンピックの主催国には、OBSが国際放送センター（IBC: international broadcasting center）を設置。IBCが一括して世界中の放映権を持つ放送局（RHB: rights holder broadcasting）にオリンピック映像を届けます。これを国際配信するといいます。

今回の東京オリンピックでは、IBCは江東区有明の東京ビッグサイトに置かれました。メインプレスセンターも併設されています。（学生も、この時期にはすでにその映像を見ていました…）

日本の場合は、NHKと民放がJC（ジャパン・コンソーシアム）という組織を作っていて、JCがオリンピックの放映権を持ち（つまりRHB）、IBCからの国際配信を受け、さらにJCはOBSに協力して取材も行います。

◇取材された映像（国際映像とユニ映像）と放送

OBSは各国の放送局に競技映像を委託制作する形をとっており、取材された各競技映像（JCもNHK・民放の垣根を超えた共同体の取材チームを作って協力しながら各競技を取材します）はいったんIBCに集まり、IBCから世界中の加盟各局へ国際配信されます。これを国際映像といいます。国際映像はOBSに協力する各国の放送局が取材、日本のテレビ局もJCとして共同取材をするため、例えば、NHKで民放のアナウンサーの実況している声が聞こえたりするなど、普段とはちがう放送が行われています。（このあたりが、学生が一番興味を示したところです）

視聴者から見たオリンピック映像には、IBCが送ってくる国際映像と、それとは別にNHK・

民放各局が独自に取材したユニ映像があります。ユニ映像は、あくまでも、放送局独自の映像で、その放送局がこだわった画面作りなどを見ることが出来ます。

JCは日本国内でどの競技をどの放送局がいつ放送するかなどの調整を行い、タイムテーブルが出来上がります。各放送局は、国際映像とユニ映像を合わせながら放送しています。今回、地上波では過去最大450時間放送されました。大会期間中のほぼ毎日9時前後（5時半からの時も）から23時の競技終了まで放送。深夜には録画で3時間の『東京五輪プレミアム』を編成。それ以外に、各局独自のオリンピック番組が放送されています。

1年延期された東京五輪は、7月23日午後8時から東京・国立競技場（新宿区）で開会式がおこなわれ、8月8日に閉会式が予定されていました。200を超える国・地域と難民選手団の計約1万1000人が国際オリンピック委員会（IOC）に出場登録しており、史上最多となる33競技339種目を競うこととなります。日本選手は全競技に参加し、これまででもっとも多い583人を予定し、過去最多だった1964年東京五輪の355人を大幅に上回りました。ちなみに、1964年のアジアで初の第18回オリンピック東京大会では参加国94か国。参加選手5586人でした。

しかし、「オリンピックを見たい」と期待しながらも、学生は「オリンピックでコロナが広がるのが怖い」と一様に声を揃えていました。

政府は、オリンピックは選手・大会関係者と、他の人たちが接触しないよう、バブル方式を取ると表明、無観客試合に舵を切る姿勢を見せていました。

開会前のおよそ一週間前、7月15日の授業の出席者は46人。

「オリンピックに反対」が32人。「賛成」13人でした。さらに尋ねてみました。「オリンピックを楽しみにしていない」は23人。「楽しみにしている」は18人でした。

振り返ってみれば、ちょうどこの時期、学生向けのワクチン接種が始まり、彼らはワクチンを打つか打たないか、ワクチンに関するデマも流れ、大いに悩んでいた時期でした。オリンピックによる感染拡大を心底恐れていたのです。

ふたを開けてみると、世間一般にテレビの視聴率は良かったようです。^{xii}7月23日にNHKが放送した開会式の平均世帯視聴率は56.4%（関東地区）で、競技映像も軒並み高い視聴率をマークしています。

五輪期間中にコロナの新規感染者数を連日更新する中、コロナ禍で外出を控えていた「ステイ・ホーム」で、視聴が伸びたと思われまます。（ちなみに1964年の東京オリンピックの開会式は63.2%。）*ビデオリサーチ社

オリンピック会期期間中、閉会式まであと3日を残す8月5日の授業の出席者は40人。

改めて聞きました。「オリンピックは（中止したほうが良いと思ってはいたが）、開催してよかった」が28人。「中止すべきだった」が9人。「延期すべきだった」が1人でした。

開始前は学生の7割がオリンピックの開催に否定的でしたが、放送を通じてアスリートの活躍に心奪われたのか、開始後は7割が肯定的に変化しています。2021年の語り継ぎたいものとして、アスリートの活躍をあげた学生も多くいました。しかし、日々感染者数が更新していく中で、オリンピックに肯定的な意見に変化した学生も感染拡大への不安を口々に唱えていました。無観客で行われた東京オリンピック。期間中、学生はアスリー

トの活躍に魅せられつつも、不安な日々を送っていました。

（Ⅱ） — （3）

「東日本大震災 3.11 から 10 年」

（i）～大人になって初めて知る 3.11 ～

3. 11に気仙沼で津波を撮影した東日本放送気仙沼支局のカメラマン千葉顯一さんを追ったドキュメンタリー^{xiii}「津波を撮ったカメラマン」（制作：東日本放送（KHB）2012年6月放送）は、世界的なドキュメンタリー番組の祭典、NYフェスティバルで国連賞を受賞しています。

私は、テレビの中の「様々な役割の中のカメラマンの仕事」を紹介するために、この作品を視聴してもらうことにしました。しかし、この授業で私は驚くような体験をすることになります。

視聴覚教室を暗くすると、まず、スクリーンに映し出されるのは街に迫る津波の映像です。千葉カメラマンが撮影したどす黒い津波が瞬く間に町に押し寄せてくる映像です。次に、一般の人が偶然撮影していた、身の危険を顧みず津波の映像を撮ろうとする千葉カメラマンの姿が映し出されます。

自分の家を失い、家族の安否を確認する間もなく、撮影に没頭する姿…がれきの下にいる被災者を救出しようと思ってカメラから離れても救出できず苦悩する姿…。家族との再会。避難所取材では、千葉さんはカメラを横に置いて、避難してきたおばあさんの話に耳を傾けます。小学校の卒業式の合唱では、一緒に歌うはずの友達を亡くしてしまい悲しみをこらえながら歌う子供たち。つらい現実を前に一心に撮影を続ける千葉カメラマンを追った珠玉のドキュメンタリーです。

暗闇の中で、70人の学生の目が異様な輝きを帯びて光っているのです。キラキラというかピカピ

カとか。身じろぎもせず、食い入るように画面に見いる学生。誰も頬杖さえついていません。私のいる中央の教壇の左右にあるスクリーンに、学生たちの視線が集中し、私は軽い眩惑を覚えるほどでした。今まで色々な場面で様々にVTRを視聴してもらう機会はありましたが、このような、視線に射抜かれるような思いをしたのは、これが初めてでした。衝撃的でした。

この日の授業では、VTRを視聴後、震災10年後をテーマにした朝日新聞の「震災報道を考える」（テレビ朝日と朝日新聞共催）メディアフォーラムの報告記事^{xiv}も読みました。*朝日新聞2021年3月16日

これは、ジャーナリストの池上彰さんがコーディネーターを務め、テレビ朝日アナウンサー下平さやかさん（下平アナは10年前の3月11日2時46分の震災発生の第一報を伝えました）が司会進行を務め、震災報道に携わった人たちをパネラーとして、視聴者読者と共に震災報道を考えるイベントです。震災の翌年からこのテーマで年一回開催されています。

今回は、千葉頭一カメラマン・写真家の安田菜津記さんなどが出席し、改めて311の報道について考えました。（2021年は感染防止のためオンライン開催）。

フォーラムの報告記事の中で、千葉さんは、「私の反省点・津波は撮れたが、近所の人達が流されていく家を見ている表情や、人が流されていく様子は撮影できなかった。遠慮があったのか、配慮だったのか、そこはよくわからない」、過酷な避難所ではカメラを回せなかった、と、10年前を振り返りました。

そして「行き届いていない社会が分断を生む。弱者に目を向けた報道の在り方を考えていけないと感じている」と語っています。普段新聞をあま

り読むことのない学生も、この日はVTRで見た千葉さんの記事を丁寧に読んでいました。

この日の学生のリアクションペーパーは、実に熱のこもったものでした。

「自分が小学校3年生で体験した地震への恐怖を思い出した」「自分の父親が消防士として被災地に救助に向かった、待っている間心配で仕方なかったこと」「千葉さんのようなカメラマンがいなければ大災害の記録が残らなかったことに気づいた」「熱海の土砂災害と重なり胸が痛くなって、他人ごととは思えなかった」…。発災当時子供だった彼らが成長して大人になって初めて、あの時に起きたことは何か、理解したようでした。

講義終了前の10分ほどの時間で、以下のようなまとまった文章を書いた学生もいました。2つ紹介します。

「今日のビデオを見て改めて震災の怖さとメディアの大切さを実感しました。私は東日本大震災当時9歳で、その時の記憶は残っているようで日に日に薄くなってしまっている気がします。しかし、当時の映像を千葉さんのようなカメラマンが命がけでおさめたことで、皆がいつでも鮮明に思い出することができます。その映像にうつった人たちの救助にも役立ったかもしれません。そして今後このようなことが起きたときに備えてどのように対策を取るのかのヒントにもなります。情報をありのままに伝える、残すという事はたくさんの命を救う事にもなるのだなと感じました。千葉さんは家を失い家族の無事もしっかり確認できないまま、カメラを片手に救助や取材にあたり、同じ地域に住む仲間として、自分にできることを探していて、その人間性も素晴らしいと思いました。やはり『ただ撮ろう』という考えではこのような

映像は取れないので、良いものを作るにはその人の考え方や思いやり、着眼点が大切なのだ、と感じました。私も将来、どんな仕事に就くにしろ、千葉さんのように常にだれかのことを考える姿勢はわすれないようにしようと思いました。」

この学生は、千葉さんの姿に感動しながら、人とは、仕事とはどうあるべきか、しっかりと考えています。「将来どんな仕事に就くにしろ…」と書いているのは、すぐそこにある就職試験への覚悟ともとれる内容です。

「私は東日本大震災が起きた時に自宅にいました。今までで一番大きい地震でした。

その時『怖い。』という感情しか出てきませんでした。しばらくして、テレビをつけると、津波で家や自動車、がれきなど勢いよく流されたている映像が流れており、私は絶句し、自然と涙が止まらなくなりました。テレビというツールがなければ、津波が起きている事や行方不明者や死亡者が何名いるかなどの情報は伝わりません。アナウンサーやカメラマンの方がいるからこそ、今日の映像が受け継がれており、現地の情報が正確に伝わっていると思いました。改めてビデオを観た時にカメラマンの仕事の大変さと偉大さを感じました。・・・千葉さんはカメラマンとしての使命感により最後まで震災の様子を取り続けたことに感動しました。後世に受け継がれる大切な映像だと思います、何気ない日常を今送れていることに感謝し、毎日丁寧に生活していきたいです。3月11日に起きた出来事は一生忘れません。」

多くの学生が同様に、カメラマンの仕事、メディアの重要性を理解し、自分たちが今おくることのできる日常に感謝の気持ちを述べていました。

学期も後半にさしかかり、メディアの役割の中の「記録する」というテーマの中で、私は再び東日本大震災に関するドキュメンタリーを見せることにしました。

『津波を撮ったカメラマン』は発災直後を描写していましたが、今回は^{xv}『3.11を忘れないSPゼロから街をつくる、ということ～陸前高田10年の全軌跡～』という10年間の記録です。

私の学生が、小学生から短大2年生になるまで10年。学生は、自分たちに流れた時間と被災地に流れた時間の違いを噛みしめるように画面に見入っていました。

『テレメンタリー 3.11を忘れないSP
ゼロから街をつくる、ということ～陸前高田10年の全軌跡～』

2021年3月14日（日）放送

テレビ朝日（3月13日27:30～28:30）

制作：テレビ朝日 プロデューサー：浦本勲

番組の紹介文から。・・・・・・・・・・

建物2500棟が並んだ岩手・陸前高田市の市街地は、津波で消滅した。新たな街をどこにつくるか。多くは安全な高台を望むものの、広い土地は無く、被災した地に再び、新たな街をつくることになった。被災地最大の復興計画がスタートしたものの、ゼロからの街づくり。かさ上げ工事だけでも数年の月日がかかる。一方で多くの事業者は高台や内陸部で店舗を再開。新たな街に戻るべきか、選択を迫られる。テレビ朝日は震災直後から10年間にわたり陸前高田の「街」と「人」を記録。総事業費1660億円。被災地最大のプロジェクト「ゼロからつくった街」10年の軌跡を追った。・・・・・・・・

この作品には、津波の映像は一切登場しません。街の抜け殻と、再建のための工事、砂ぼこり、雪

景色、古い町並みで行われる最後のお祭り、淡々と丁寧に映像が積み重ねられていきます。津波で父を亡くしたお蕎麦屋さんが店を再建しようとする姿を縦軸として、街の人たちの営みが描かれています。取材班は10年間ここに通い詰めました。めぐる季節、風の音、俳優の段田安則さんの端正なナレーションが見る人を引き込んでいきます。

10年は長い年月です。取材を受ける側、取材する側の信頼関係なしには記録はできません。当初取材を受けてもよいと考えていた人も、状況が変われば、受けられなくなることもあります。お亡くなりになる方もいます。

また、コロナ禍にあっては、東京から取材に行くこともままなりません。取材者たちはPCR検査を受け、陰性を証明し、なおかつ所定の隔離期間を経て、現地に入りました。継続取材は本当に難しいものです、体力も時間も、あきらめないという気持ちも大切です。

2021年は、東日本大震災から10年の節目でした。テレビでは各局が力を入れた番組を予定していたはずでしたが、コロナ禍の壁に阻まれ、おそらく縮小体制の中での報道だったのではないかと考えます。そんな中に放送されたのがこの作品でした。

…余談になりますが、私の担当する『朝まで生テレビ!』は討論番組ですが、2021年は3月に先立ち、^{xvi}2月の放送で「東京電力福島第一原発事故から10年」を当時の総理大臣、被災した福島県民の方、専門家を集めて事故10年を振り返り、検証しました。

VTRを流しながら、今回もまた、私は不思議な感覚に襲われました。

今度は、暗闇に目がキラキラ光っています。

キラキラというのは違う、何というか、青い闇の中に星が瞬くような感じでした。若い人の目

は綺麗だからなのかな、と思ったものです。ほとんどの学生が身じろぎもせず、1時間。彼らにとって長いドキュメンタリーを見るのはおそらく初めての体験だったのではないかと思います。感想の一部を紹介します。

「ゼロから街を造るという事を見て、東日本大震災があった10年前から今までこんなに頑張っていたのだ、と思い、泣きそうになりました。震災が起こる前までの思い出のいっぱい詰まった地が津波で一瞬にして無くなってしまい、約2000人の犠牲者がでってしまったところでとても苦しくなりました。・・・(津波のことを周りの人に知らせて助けようとして亡くなってしまった蕎麦屋の) 及川さん。お父さんのためにも、お客さんのためにも、及川さんの息子さんがお店の再建に葛藤する姿に、とても感動しました。街を一から作り直すという事は時間もお金もかかるのが現実ですが、みんなが協力しながら、街づくりを頑張っている姿を私達より若い世代の子供にも見てほしいと感じました」

「たった一日の中の数時間ですべてをゼロにさせるほど恐ろしい津波の恐怖を体験した被災地の方々の気持ちは私たちにははかり知れないものだと思います。ゼロから街を造ることも大変ですが、なによりもまた津波が来ることの恐怖や不安と自分たちが育ってきた街の思い出が新しいものになる複雑な思いが混在している様子がとても印象的で、色々な思いがこみ上げてきました。つらい思いをたくさんしているのにもかかわらず復興のために様々苦勞を強いられていて胸が苦しくなりました。10年経った今でもつらい思いをしている人がたくさんいることを絶対に忘れてはいけないし、私たちにできることは何でもやる気持ちを持つことが大切だと思います。震災を知らない若い

世代にもこの出来事を重く受け止めてほしいと思いました。』

「お祭りのシーンでは泣いてしまいました。私自身よさこい踊りをしていた時期があったり、地元で七夕祭りが開催されていることからお祭りが大好きなので、最後だと分かっているながら行う祭りほどつらいものはないだろうなと思いました。それに加えて、映像に映っている人々がとっても楽しそうで笑顔だったので、余計に心にくるものがありました。私が知らなかっただけで、早い段階から復興が始まっていて驚きました。被災した方たちだからこそ、感じることもあるだろうし、後世のことを考えてまちづくりをされていてすごいと思いました。子どもたちが元気に遊んでいる姿にも泣きそうになりました。みんなが守ってくれた町なんだよと、当事者ではない私からも、大切に語り継がなければならないことだと改めて感じました。10年という長い月日に起こった出来事をVTRを見て、普通に暮らせている事のありがたみをしっかり感じて生きていきたいと思いました」

私は何回もこの日の感想を読み直して、改めて気が付いたことがありました。66人の出席者のうちおよそ半分の学生が「忘れてはいけない、語り継ぎたい、若い人に伝えたい」としっかりと書いていたのです。

授業の中では、予め何も解説せずにVTRを見もらったのですが、幼い頃に東日本大震災を経験した彼らだからこそ、被災地の10年間の軌跡を見て、「語り継ぐべきもの」と自覚したのだと思いました。彼らの瞳が煌めいていた理由はそんな気持ちの表れだったのかもしれませんが。

(II) — (3)

「東日本大震災 3.11 から 10 年」

(ii) ～学生と制作者の対話～

私は、この学生の溢れる熱い思いを私一人のモノにしておくわけにはいけない、「津波を撮ったカメラマン」の千葉顯一さんと「陸前高田の10年」の浦本プロデューサーに知ってもらいたいと考え、彼らの感想をお送りしました。そして、お二人から心のこもったお返事を頂き、学生に伝えることができました。学生の熱の煽られるように、制作者と学生の対話が生まれたのでした。この時、私はまさに情報を伝える媒体（メディア）となっておりました。

「ゼロから街をつくる、ということ。陸前高田市の10年の記録」番組プロデューサー 浦本勲さんから。……

「ドキュメンタリーは『人の生き様』だと思っています。

その『生き様』を通じて、視聴者に『何か』を『響かせる』ことが出来るかどうか、が私たちの役割だと考えています。

今回の作品で言うと、観終わった後に、『自分も何らかのサポートをしたい』『震災のことを忘れちゃいけない』と欲していただけでは嬉しいし、直接的なことでもなくとも、例えば、遠く離れて暮らす実家の親に電話してみようかなとふと思ったり、自分の大切な人たちのことを考えてみたりとか、つまりは色々な解釈、受け止めをしてもらえる、『普遍的』なものでありたい、というのが究極の目標です。」……

学生の中には「このドキュメンタリーを見て、さっそく実家の親に電話した」「私に手伝えるこ

とがあるならやってみよう」という声がありましたので、まさに浦本さんの言葉どおり。

「普遍的なもの」とは何か…。浦本プロデューサーの思いは、コロナ禍で不自由な日々の中、悩みながら生活している学生にしっかりと届いていたようです。

カメラマンの千葉さんは、命がけの取材に感動した学生に対し、こんな風に応えて下さいました。……

「賢明な皆さんに言うまでもありませんが、仕事上で命を懸けるとは、何かを（自分や家族など）守るために真剣に取り組むということです。これから社会で活躍する皆さんは、物理的にまた精神的に危険となるような仕事に命を懸けないようにしてください。みなさんの命はみなさん個人のものではありません。ちゃんと背負ってくれる人がいる筈です。」

そして、さらに、学生に生きていくためにいつか必ず必要となる知恵を授けて下さいました。

「高田松原には震災前、防潮林としての松林がありました。津波直後に1本だけあの松が生き残ったのですが、後に海水の影響で枯れてしまいました。陸前高田市では賛否ありましたが1億6千万円以上かけて人口再生しました。従って、『奇跡の一本松』はいわゆるサイボーグとなってしまいました。プラスチックの松と言ってしまって例えば夢も希望もありませんが、それを復元し『希望の松』として市の復興のシンボルとしています。これが人間業です。生まれ変わったこのモニュメントには今でも沢山の人が訪れています。そのため街も潤い復興の一助になっている、私はすばらしい生かし方だと思います。街もそうです。震災

前にあったからと震災前の形に戻そうとすると大変な経済的・精神的負担がかかります。そして長い時間も必要です。被災した街や一本松のように、元に戻すのではなく、新しくする『生まれ変わる』と考えると自由度が増し様々な発想が生まれます。学生の皆さんもこれから長い人生、何か大切なものを失う事があるかもしれない、その時に元に戻すのではなく『生まれ変わる』という発想をしてみてください。また違った世界が見えてくるかもしれません。」

（Ⅲ）「特別な2年生」が語り継ぐもの。

（1）～端境期の彼らと災害列島日本～

2021年前期の授業は、学生に導かれるように進みました。

失われた学生生活を取り戻そうとする焦燥感、コロナ感染への恐れ、氾濫するワクチン情報に翻弄され続ける不安、楽しかったけど感染拡大の方が怖い東京2020オリンピック大会、東日本大震災を自身の体験として語り継ぎたいという自覚、…。学生のその都度の感情に煽られながら、時事問題を通して、メディアとは何か一緒に考えた時間でした。

私は学期が終了して半年たってからやっと、最初はぎこちなかった学生が次第に熱を帯びていったのはコロナ禍で閉じ込められていたエネルギーがあふれ出たのではないか、と思い至りました。

コロナ禍は、学生にとって、かけがえのない10代最後の時間に起きたことです。何が起きているのかわからない子供でもなく、社会経験のある大人でもない彼ら。子供と大人の端境期にあって彼らだけにしか感じる事ができなかった思いがあったはずです。

特に、東日本大震災は、彼らにとって幼い頃に

肉体的な恐怖を伴った体験でした。たまたまこの授業が震災から10年の節目ということで授業のテーマに取り上げた所、大人になって幼いころの経験を自覚的に表現できるようになり、授業の中でVTRを見たりすることによって学びなおし、社会の共有事項として伝えていこう、という段階に至りました。

災害列島日本では、報道機関も行政も、あるいは有志達、多くの人々が各地で災害の記憶を繋げようとしています。被災者が被災者としての経験を語り継ぐのは勿論、先に紹介した「メディアフォーラム」のような取り組みもあります。また、明治学院大学の古川柳子教授らが市井の人々と組んで土地の記憶を語り継ごうとするなど、^{xvii}アカデミズムと連携する動きもあります。

近年の異常気象による災害で、人々は危機感を共有しています。私の学生もまた、災害列島日本の中の社会の一員として自らの体験を自覚的に語り継いでいくことでしょう。

(Ⅲ) 「特別な2年生」が語り継ぐもの。

(2) ～戦争について考える～

私はメディア論の中で、ラジオの果たした役割の一つとして必ず1945年8月15日正午に放送された『玉音放送』を取り上げています。

今年は丁寧に説明する時間はなかったものの、学生と一緒に玉音放送の原稿を音読し、この言葉が多くの人に伝わったことで、戦争の終結へと進んだことを伝えました。

学生にとっては、戦争などもう何世代も前のことになっています。日本は長い間平和を享受してきましたが、それは先の大戦への反省と復興への努力の積み重ねがあったからです。

昨年度、2020年の戦後75年はコロナ禍1年目で、あまり大きな盛り上がりはありませんでした。パ

ンデミックの中、それどころではない、という雰囲気すらあった様な気がします。2021年はどうだったのでしょうか。

前述したように、今年度ワクチン接種の対象を広げていく際に用いられた「職域」という言葉に、玉音放送を思い浮かべた私は、8月15日(日曜日)の新聞のラジオテレビ欄を見て愕然とする思いでした。いわゆる「戦争関連番組」はほんのわずかでした。

もちろん、ニュースの中では『終戦の日を考える』などの特集が組まれていました。しかし、一般の人が見やすい時間帯に放送された戦争関連の特別番組はごくわずかで、NHK、テレビ朝日、TBSにそれらしき^{xviii}番組が組まれているだけでした。かつてはこの時期には、各局が力を入れた戦争をテーマにした3夜連続の大型ドラマや、戦争をテーマにした映画、アニメなどが放送されておりました。

念のため、13日の金曜日からさかのぼってみましたが、状況は同じようなものでした。

この日のNHKは、NHKスペシャルの枠で、開戦秘史、戦争前夜からの各国の思惑、駆け引きなど、政治の側面から戦争を扱っていました。

(NHKは14日には同じ枠で「戦争を支えた女性たち」を放送していました。)

テレビ朝日では、上松道夫監督が5年がかりで取材をした『ラストメッセージ～不死身の特攻兵 9回の“特攻出撃”を命じられ9回とも生還した兵士がいた！～』を放送しました。特攻に9回出撃して生還した元陸軍兵佐々木友次さんへのインタビューを中心に構成したものです。生きたいと願う個人と国家との対立…国家に翻弄された人間の数奇な運命を追うことで戦争を描いた力作でした。

TBSは、沖縄で育ったタレントのりゅうちえるさんが戦争と沖縄について考える姿を描くもの

でした。現代の若者の目を通して戦争と沖縄の歴史と現在を伝えていました。

戦争の惨禍を決して繰り返すまい、と進んできた日本ですが、終戦記念日にこそ「語り継がれる」はずの「戦争を考える番組」がここまで少なくなるとは…。

コロナ禍で、東日本大震災の取材と同様に取材がままならなかったことも確かです。

しかし、実際に戦争体験者も少なくなり、例年武道館で行われNHKによって全国に生中継される^{six}全国戦没者追悼式に参加する遺族関係者も少なくなっています。昨年、今年とコロナ禍にあっては、参加者数も絞られて行われました。

戦争については、体験したお年寄りも本当に少なくなりました。かつては3世代家族などの中で、生活の中で語り継がれてきた戦争。

私自身、同居していた祖父が軍属としてシンガポールに赴いたこと、そこで捕虜となったことなど、何かの拍子に話してくれることがありましたので、戦争という恐ろしいものが確かにあったのだ、と、幼心に理解することができました。普通の人の生活の中では、面と向かって戦争の体験をじっくり話す、という機会はなかなかありません。多くの家庭で、私自身がそうであったように、日常の中で、ほろっとこぼれるように、昔語りの中で戦争の記憶が引き継がれていったのだと思います。

また、家族を構成する人数も少なくなっています。2020年の国勢調査によれば、東京都の平均世帯人数は2人を割り、1.95人となりました。本学のある神奈川県でも2.19人です。今や、家族の中では、昔話を老人から若者へ引き継ぐことはままなりません。

…それでも何人かの学生は、おばあちゃんから戦争の話聞いた、などと、リアクションペーパー

に書いてくれましたが…。

ちなみに、民放連が加盟各社の2021年の終戦番組を^{six}調査した所、当時を知る経験者が少なくなる中で「絵」を通じて戦争の記憶を繋ごうとした6社を紹介しています。つまり、当事者の声ではなく、紙媒体に残されたものが主眼になっていったという事です。

…もちろん、当事者が亡くなったからこそ、語られる事実というものもあります。^{xx}NHKのETV特集で描かれた「テニアン島の生存者」もそうです。あまりにも悲惨で壮絶な体験は今まで語ることができなかった、今だからこそ語れる貴重な記録となっています。

歴史的な出来事を節目の年に振り返り、改めて考えることは、人の大切な営みであり、メディアの大きな役割の一つです。

しかし、戦争に関しては、直接の関係者が語り継ぐ時代はそろそろ終わりに向かっていきます。体験者がいなくなった時、私たちはどう過去の事実と向き合えばよいのでしょうか。

ある番組の中で、歴史家の保坂正康さんが、2021年1月に亡くなった半藤一利さんを追悼しつつ「戦争の体験」を「歴史」として学びなおす時期に来ているのではないかと指摘されておりました。

私も2021年は、まさにそういう時期に入ったのだと思わずにはられませんでした。

保坂さんは、別の時に、このようにも指摘しています。「同じ日本であっても、空襲を体験した地域とそうでない地域では、戦争の受け止め方もその地域の戦後の歩みも違っている。そういう事実があることを知っておかなくてはいけない」というのです。私は、地域によって異なる体験があることを知って、「体験を超えて、広く戦争を学

びなおすことが必要なのだ」ということだと理解しました。

「体験を超えて広い目で学びなおす」。これは、東日本大震災、コロナ禍も同じではないでしょうか。

(Ⅲ) 「特別な2年生」が語り継ぐもの

(3) ～体験を超えて、学ぶ～

2020年、昨年の私の学生は、『テラスハウス』に出演し亡くなった木村花さんを悼み、木村さんの中傷したSNSを憎み、BLMに共感し、コロナに負けずとともに戦おう、と語っていました。ある意味、他者への共感に溢れたクラスでした。

一方、2021年の学生はすでに一年以上コロナに拘束され、氾濫するコロナの情報に翻弄され、切羽詰まった状況にありました。

疲れ切ってぎこちなく、しかし、何かの拍子に彼らの感情があふれ出し、私が圧倒されてしまう程のパワーを発揮した「特別な2年生」でした。感染防止のため、例年より時間を短縮して行わざるを得なかったグループワークなどにも集中して熱心に取り組みました。彼らはみるみる成長しました。



「2021年のグループワーク 換気ばっちり」

私は、彼らが苦しんだコロナ禍の体験をいつか歴史としてとらえなおし、後世への教訓としてほしいと考えています。自らの頭で考え、迷い、判断したことを重ねて人は成長していくものだと思います。自分でしっかりと情報を選び、自分で考えて進んでいくこと。この体験が「特別な2年生」にとっての財産でありますように。

(Ⅳ) 新しい課題。

その不安に何と答えようか。

2021年は私の勤務地、六本木交差点の近くからついに書店が消えてしまった衝撃的な年でした。かつて町の賑わいの中心にあった「誠志堂」が無くなり、次に若者文化を華やかに牽引した「青山ブックセンター」が書店プラスαの「文喫」に変わりました。地下鉄日比谷線の六本木駅の上の「あおい書店」が無くなって、同じ場所に「ブックファースト」ができたものの、2021年の4月に閉店しました。駅前の書店が日本各地で消えています。

また、最近、電車の週刊誌の中吊り広告が次々と消えていきました。2021年主要4誌がすべて終了。週刊文春は8月下旬に中吊り広告を終了。週刊新潮も9月30日発売分の広告で終了となりました。1960年代からの通学通勤時の風物詩が消えました。紙の、書籍文化はどうなるのでしょうか。

2020年の授業はほとんどオンラインで、スマホでは資料が読みづらい、と言う学生がおりましたので、2021年は紙の資料を配布したのですが、学生が「先生が机の上に置いてくれる資料は、紙というものがあり、印刷という技術があって初めて、私たちのもとに届き、私たちは資料を読むことができるものだと思います。歴史は有難いものです。」と言ってくれました。また、「『赤毛のアン』は繰り返し本で読みたい」とか、「同年代の芥川賞作家宇佐美りんさんの『押し、燃ゆ』を一頁ず

つめくりながら本で読めることが幸せです」といった学生もいました。

SNSを使いこなす若者にとっても、人類が営々と築いてきた紙媒体、印刷物、書籍は大切なのだと、紙世代の私は少し嬉しくなりました。

しかし、その一方、心に引っかかることがあります。学期終盤、あなたにとって大切なメディアは何ですかと尋ねたところ、「スマホがないと生きていけない」「今ではなくては困るものとなった。最近では持っていることが前提のことが多い。(予約も授業を受けるためのシステムも)」と返答した学生がいました。

「スマホなしでは、授業にも参加できず、就職の試験を受ける機会もなくなり、全てがスマホ経由でないと生きていけない。これが私達です」と、叫んでいるのです。「友達とつながる」「好きな動画を見る」というのとは全く異なる観点から、生活どころか人生をスマホに依存せざるを得ない状況を不安視しているのです。さらに言えば、自分の人生を支配されているという感覚なのです。

メディアがどうか、SNSのリテラシーがどうか、とか、そんなこと以前に、掌の中の電気通信機器にすべてをゆだねざるを得ない恐怖が言外ににじんだ学生の声でした。

さあ、来期の授業はここからスタートです。

【謝辞】

この稿を書くにあたり、小棹理子先生、上野敦史先生、浦川あかねさん、千葉顕一さん、長谷部牧さん、浦本勲さん、兵頭潤さん、大槻裕志さんに、様々にお世話になりました。ありがとうございます。この場をお借りして御礼申し上げます。

【引用文献・出典等】

- i 安倍晋三首相は2020年2月27日の新型コロナウイルス感染症対策本部で、全国の小中学校と高校、特別支援学校に臨時休校を要請する考えを表明。首相は「子どもたちの健康、安全を第一に考え、多く子どもたちや教員が日常的に長時間集まることによる感染リスクにあらかじめ備える」と述べた。「全国すべての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について3月2日から春休みまで臨時休業を行うよう要請する」と語った。実際に休校するかは学校や地方自治体の判断となり、幼稚園や保育所、学童保育は対象から外した。
- ii 『朝まで生テレビ!』1987年4月スタートの深夜討論番組。テレビ朝日系列にて放送。司会：田原総一朗。進行：渡辺宜嗣・下平さやか。昭和・平成・令和と“日本と日本人”を立場や意見の異なる論客たちが一堂に会し論じ続けている。コロナ下では一堂に会する討論は行えず、ソーシャルディスタンスを取るためリモート討論となった。筆者は1991年1月に1回、2013年から現在までプロデューサーを務める。
- iii 雲仙普賢岳の火砕流事故 1991年6月3日、雲仙普賢岳で発生した火砕流によって43人が犠牲となった。報道関係者16人、消防団員12人、一般人6人、タクシー運転手4人、火山研究者3人、警察官2人。(内閣府まとめ)九州朝日放送(KBC)のクルーと、テレビ朝日社会部の城詰靖之記者(27歳)も犠牲となった。将来を嘱望された心優しい記者だった。テレビ朝日では、毎年この日犠牲者を追悼し、改めて取材の安全を誓っている。
- iv 読売新聞 2021年7月6日朝刊より。
- v 厚労省のHPだけではなく、河野太郎ワクチン担当大臣のブログ「ごまめの歯ざりしり」(2021年6月24日付)の中でも、ワクチンで不妊にはならないと言及している。<https://www.taro.org/2021/06/%E3%83%AF%E3%82%AF%E3%83%81%E3%83%B3%E3%83%87%E3%83%9E%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6.php>
- vi 朝日新聞 2017年3月23日より。
昨年4月の熊本地震直後に、「動物園からライオンが放たれた」とツイッターに投稿し、熊本市動植物園の職員の業務を妨げたとして偽計業務妨害の疑いで逮捕された神奈川県内の男性(21)について、熊本地検は22日、不起訴処分(起訴猶予)にしたと発表した。地検は「諸般の事情

- を考慮した」としている。処分は21日付。熊本県警によると、男性は昨年4月14日の前震の約25分後、インターネットで入手した街中を歩くライオンの画像とともに「地震のせいでうちの近くの動物園からライオン放たれたんだが 熊本」と投稿。これが拡散し、動植物園の職員に多数の電話対応をさせた業務妨害の疑いで、7月20日に逮捕された。男性は逮捕時に容疑を認め、「見た人をびっくりさせたかった」と話したという。7月22日に釈放後、地検が任意で捜査していた。(鈴木付記：当時、「男性の直接の罪は動物園に対する“業務妨害”であって“フェイクを流した”そのものの罪ではなかった、果たして、フェイクに対する罪はどうか」という議論が活発に行われた。SNS上で多くの情報が出回る中、何をフェイクとするのか、という所から出発して大いに考えさせられたテーマだった。)
- vii 日経新聞2020年4月6日付
データの世紀 情報パンデミック『善意の投稿 人類翻弄』『コロナ情報拡散力、SARSの68倍』
買い占め騒動分析 真犯人は『デマ退治』
- viii 総務省HP https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/d_syohi/ihoyugai_05.html
- ix NHK「おはよう日本」7時台の特集コーナーより。
- x 同じ9月3日、厚労省のHPの「新型コロナQ&A」の中にこんなコラムが掲載された。
「不妊になるって本当？妊娠中でも大丈夫？女性のための新型コロナワクチン(mRNA)解説」
日本産科婦人科学会 SARS-CoV-2(新型コロナウイルス)感染対策委員会 委員・日本産婦人科感染症学会 幹事(広報・編集担当)相澤 志保子(鈴木付記) この中の「妊娠を希望している方へ」の項目の中にこんな記述が…。「mRNAワクチンで、不妊になるという科学的な根拠は全くありません。どういうわけか、ワクチンを接種すると不妊になる、という誤情報は古くからあるのですが、これまで使われているワクチンでも、接種が不妊の原因となった例はありません。」
女性医師がわかりやすく解説しているのも、女性には抵抗なく読める内容になっている。もう少し早く「ワクチンデマ」の最中にでも掲載されていたら、より訴求効果は高かったかもしれない。
- xi 宮内庁HP 昭和20年8月15日大東亜戦争終結に関する詔書
<https://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/koho/taisenkankei/syusen/pdf/syousyo.pdf>
- xii ビデオリサーチ *ビデオリサーチ社HPより
https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/sport/olympic-summer/tokyo2020/01.html
- xiii 「津波を撮ったカメラマン」
東日本放送(KHB)2011年6月7日(火曜日)深夜1時56分放送
NYフェスティバルで国連賞銅メダルを受賞した。
<http://www.khbtv.co.jp/s003/070/20140418143455.html>
- xiv 「メディアフォーラム 震災報道を考える」
2011年秋、テレビ朝日広報局お客様フロント部と朝日新聞CSR推進部が「読者視聴者と共にメディアについて考えよう」と共同で立ち上げた企画の一環のイベント。当時、筆者は部長として、立ち上げに携わった。本学の「メディア論」を総括する上野敦史講師は担当者として、長年、制作に携わっている。この模様は朝日新聞に掲載されるとともにテレビ朝日の自己検証番組「はい！テレビ朝日です」で放送・配信されている。
- xv 「3.11を忘れないSP ゼロから街をつくる、ということ～陸前高田10年の全軌跡～」 テレビ朝日「テレメンタリー」HP <https://www.tv-asahi.co.jp/telementary/backnumber/>
- xvi 『朝まで生テレビ！』2021年2月26日放送。「激論！福島原発事故10年、ド～する！？日本のエネルギー」。
当番組では、1970年代から精力的に原子力を取材しているジャーナリストの田原総一郎さんが司会者でもあり、日本社会の課題でもあることから、1987年の番組開始以来、原子力問題を推進派反対派・専門家・当事者を一堂に集めた討論を20回以上行っている。原発事故の翌年には福島から放送するなど、事故後は必ず年1回はこの問題を取り上げてきた。
10年の節目の年には、事故直前から原発担当となり、東京電力第一発電所の事故後を継続取材しているテレビ朝日報道局吉野実記者が廃炉処理や、避難生活を続けている福島県民について報告。事故発生当時の菅直人首相、事故後対応に当たった細野豪志復興大臣を迎え、事故で避難を余儀なくされたにもかかわらずほとんどの住民が10年経って帰還を果たした福島県の川内村村長、いまだに多くの町民が帰還できない中、ごくわずかの人が戻り始めた大熊町の町民の方などが、専門家を交え、事故当時には語られなかった現場の様子や、

今なお続く課題を討論した。

なお、吉野実記者は2022年2月『「廃炉」という幻想 福島第一原発、本当の物語』を上梓している。

xvii 古川柳子明治学院大学教授らのプロジェクト

「熊本地震から3か月・震災と住民ディレクター報告会 ～ポケットのiPhoneで中継を・・・「当事者」の声をいかに伝えるか 岸本晃(一般社団法人・八百万人/NPOくまもと未来)」。2016年4月に発生した熊本地震。その中で被災者となりながら、ポケットのiPhoneをツールに「被災地からの被災者による被災情報をインターネット中継で約2週間にわたり発信続けた住民ディレクターたちの活動報告会&シンポジウムを企画。住民ディレクターのネットワーク(社団法人八百万人・NPOくまもと未来)を共催としてシンポジウムを主催。当事者たちに発信内容やそれを可能にした平時からの活動について報告をしてもらうとともに、災害時の当事者による発信の意味を議論した。

xviii 2021年8月15日の番組表から。

◇NHK:11:50「全国戦没者追悼式 中継 日本武道館」

21:00「NHKスペシャル回線秘史・太平洋戦争 日中米英の熾烈な暗闘 中国最高指導者の日記 日本・和平工作の誤算 米大統領の迷いと決断」

◇NTV:24:55「ドキュメント21 祖国が投下した原爆 ヒロシマ伝える米国人」

◇テレビ朝日:13:55「不死身の特攻兵 9回の“特攻出撃”を命じられ9回とも生還した兵士がいた！彼はなぜ生還できたのか？死の半年前に語ったラストメッセージとは？」制作は映像作家、上松道夫監督。テレビ朝日在職中は『ザ・スクープ』『報道ステーション』などのプロデューサー、編成担当役員等を歴任した。

◇TBS:15:30「へいわとせんそうSPりゅうちえる×沖縄戦 家族想う“餓死”日記『私は弾丸の戦闘機』

xix 民間放送』2021年12月8日号「戦争企画2021①」発行日本民間放送連盟

xx NHK:ETV特集「“玉砕”の島を生きて～テニアン島 日本人移民の記録～」

2021年8月28日放送 (C)NHK/グループ現代。戦前、サトウキビ栽培のため多くの日本人移民が生活を築いていたテニアン島。太平洋戦争中の昭和19年夏、強大な米軍が上陸し、島の日本軍は全滅。米軍が迫る中、日本人移民たちは、次々と集団自決に追い込まれていく。親しい者同士で命を絶った壮絶な体験。生き残った家族が生

涯抱え続けた苦悩。重い記憶を背負った人々を20年以上にわたり取材。彼らの遺言ともいべき300時間に及ぶ貴重な証言をもとに、極限の戦場を描く。

The Corona disaster, Tokyo Olympic Games, the Great East Japan Earthquake 3.11 — My Students & The media topics of 2021 —

Yumiko SUZUKI

【abstract】

The second year of the Corona disaster. The second year Media Studies students did not have a high school graduation ceremony, a junior college entrance ceremony, and the first year of junior college life that they were supposed to enjoy.

However, during their student life, they experienced the Japanese society that suffered themselves in the Corona disaster and held the Olympic Games, and learned again the Great East Japan Earthquake that was the news of their childhood with the eyes of adults.

And now they want to pass them on to a generation younger than themselves.

This paper will document how the students have grown by taking a proactive approach to the media topics of 2021 and thinking about them as their own issues.

【key words】

the Corona disaster, Pandemic, Vaccination, Fake news, Tokyo Olympic Games,
the Great East Japan Earthquake 3.11, SNS